

# JFSTA NEWS

## contents

会員通信.....	1	水産研究・教育機構からの情報 .....	6
会務報告.....	4	事務局便り .....	7

## 会員通信

### 釧路市における二つの水産関連顕彰碑 余禄 —釧路のマグロ漁業と川崎船—

野村哲一

前報までに、釧路開発の功労者とされる佐野孫右衛門(注1)と釧路の水産業の父と呼ばれた嵯峨久(注2)の顕彰碑を紹介したが、これらの碑を調査したなかで、釧路のマグロ漁業に関する興味ある資料に接したので、紹介したい。

釧路市立博物館(釧路市春湖台1-7)の二階展示室壁面に、「大型の魚」が魚市場と思われる場所に整然と並べられ、多くの人がそれを見守る一枚の写真の複製が展示されている(写真1)。この写真は、漁獲されたマグロ(クロマグロ)が釧路の市場に並ぶ風景(大正11年撮影)であった。



写真1. 漁獲され、市場に並べられた釧路のマグロ(釧路市立博物館蔵)。

釧路市においては、「鮭の釧路か、釧路の鮭か」と言われたほど、マグロが流し網漁により漁獲された一時期があった。それは、明治30年代末から昭和10年代までの30年余りの漁業であった。釧路の水産ではイワシ、サンマをまず思い浮かべ、現在の感覚では、北海道のマグロは津軽海峡周辺での漁獲程度で、「釧路のマグロ」とは意外な感じがした。

釧路市総務部地域史料室(2003)の「写真絵葉書で見る 遠い日のくしろ」には、「決して鮭ではない。釧路の市場に水揚げされた鮭が整然と並べられているのである」と説明のついた市場に並ぶマグロの写真、川崎船を背景に「鮭百万日本一、舳舳揃えて堂々と爆音いとも勇ましく行(く)手は遠き太平洋夜嵐烈しく波高く今宵は沖に波枕」との文言が左肩に記されたマグロの水揚げ風景、漁を終え帆走により帰港する川崎船、東京へとマグロを輸送する冷蔵船などの絵葉書が収載されている。爆音とは漁船の発動機の音のことであり、当時の川崎船がすでに発動機を装備していたことを伺わせる(釧路市総務部地域史料室,2003)。これらの絵葉書もまた、写真1.

と同様に、確かに「鮭の釧路か、釧路の鮭か」と言われた時代があったことを証明している。

川名(1934)は「鮭漁ト海況トノ関係ニ就テ」と題する報文において北海道の東部から南部の地域にある、釧路、厚岸、浦河、室蘭の大正末期から昭和初期のマグロ漁業の沿革や漁法、漁況について報告している。釧路の沖合にマグロが分布していた事は、航行する貨物船の乗組員の目撃情報や、サメ漁に従事する漁業者からの情報で明治末期から知られていた。明治38年(1905年)にはネズミザメの試漁でマグロが漁獲され、その有望性が報じられたり、建網でのマグロの漁獲が認められている。マグロの分布の情報が知られるようになって以後、明治40年(1907年)には38隻もの川崎船がマグロ漁に入漁している。

川名(1934)は釧路における大正10年(1921年)から昭和7年(1932年)におけるマグロの旬別、月日別漁獲高を報告しているが、緒言において、この統計の元になった記録は大正11年(1922年)から14年(1925年)は北海道水産試験場釧路支場の調査によるもの、大正15年(1926年)以降のものは、釧路のマグロ漁業の開発功労者嵯峨久(注2)の努力によるものとしている。

釧路において最もマグロの漁獲が多かったのは昭和4年(1929年)であり(川名,1934、布施,1962)、川名(1934)によれば、2,997,852貫(約11,242トン)の年間漁獲量であったとされている。農林水産省の昭和四年第六次農林省統計表によれば、この年の都道府県別のマグロ漁獲量では、北海道は福井県に次いで全国2位の漁獲量となっている。

昭和4年(1929年)の釧路で漁獲された164,208尾の魚体のサイズ区分では、大に区分した体重20貫(75Kg)以上の個体が73,474尾(44.7%)、中と区分した10-20貫(37.5-75Kg)の個体が27,576尾(16.8%)、小と区分した10貫(37.5Kg)以下の個体が63,158尾(38.5%)であった(川名,1934)。漁期はおおむね6月下旬から11月下旬であったとしている。写真1. は大正11年(1922年)に撮影されたものであるが、漁獲量がピークであった昭和4年(1929年)には、大正11年(1922年)の約10倍の漁獲量となっており、その時の市場の様子は「東洋一の釧路鮭年産壹百万円(昭和10年頃)」と絵葉書にあるようにさらに壮観な状況であったと思われる。布施(1962)の釧路漁業発達

史年表の昭和4年(1929年)の項には「鮭流網漁場最盛の年で三百万貫以上の水揚げとす。ために鮭魚粕となるものあり」との驚くべき記述もある。

漁獲されたマグロの流通に対応するため、この時期には嵯峨久らの尽力により、生産者により設立された三鱗共同魚菜市場が市場業務を開始し、流通システムの整備・充実が図られた。漁獲されたマグロの90%は鮮魚で本州へと冷蔵船で輸送され、青森、塩釜から鉄道により東京へと出荷された。全盛期には、釧路港の水揚げ金額の実に40.4%をマグロが占めていたという。

このマグロも昭和10年(1935年)ごろから急激に漁獲が減少し衰退期となる。その理由については、北海道水産試験場の報告等により、海況の変化によるものとするなど諸説がある。現在は、北海道水産現勢によると釧路の漁獲統計にはマグロは見られなくなっている。

さて、「鮭の釧路か、釧路の鮭か」といわれた釧路のマグロ漁を支えた川崎船とはどのような漁船であったのであろうか?

川崎船は、カワサキ、カワサキ船と呼ばれることもあるが、名前は福井県川崎村(現坂井市三国町)で初めて造られたことに由来するという説、河口部分で建造されたことに由来する説、出稼ぎ漁民である川崎衆(林,1971)とともに分布を拡大したためとする説など諸説があり定説はないようである。船体の大きさは長さ7.5~12m、総トン数3トン余りであり、乗組員は6名が普通で、8名ほどの場合もあった。動力はなく、帆と櫓により推進する無動力船であり、最後の最大の無動力船ともいわれている。船足も速いことから1-2日間の航海での沖合漁業にも使用が拡大していった。北海道の漁業では、釧路に限らず川崎船の導入は漁業効率の向上に大きな効果があった(長谷川,2018、赤羽,1998)。明治から長期にわたり続いてきた漁民の北漸移動と極めて関連の強い漁船であるとされている(林,1971)。写真1.と同じく釧路市立博物館二階展示室にはほぼ実物大の川崎船が展示されている(写真2.)。この船体は、建造後実際に釧路川を走行した後、市立博物館に展示されたものである。現存する川崎船はないと思われるが、北海道内では、釧路市立博物館、厚岸海事記念館、利尻町立博物館等に実物や模型が展示されている。川崎船には越前・越中・越後・庄内など

の諸型があるが釧路のマグロ漁業で使用されたものは越後型であり、展示されている船体も越後型とされている。



写真2. 釧路市立博物館に展示されている川崎船。ほぼ実物の大きさである(釧路市立博物館蔵)。

川崎船の釧路地方への導入は明治21年(1888年)に越後から手繰漁法で鱈漁を行うために導入されたのが始めとされ、明治34年(1901年)になると川崎船を使用する越後漁民により漁場は拡大し、漁獲も増加を示す。川崎船は当時の漁船としては大型で、船足も早かったが、沖合でのマグロ漁業への使用には動力を装備していないため能力不足であった。大正2年(1913年)8月にはマグロ漁から帰港する船が、時化のため釧路港を直前にして18隻が遭難し、63名が亡くなる大きな海難事故にも遭遇している。

布施(1962)は釧路におけるマグロ漁業の発展過程を、大正三年までを黎明期、以後の大正年間を成長期、昭和六年までを全盛期、以後を衰退期と区分している。黎明期で活躍したのはこの川崎船であり、以後の成長期には川崎船に動力を付けた改良型川崎船とも言うべき漁船が、マグロ漁の拡大と、大正2年(1913年)の海難事故を教訓としての安全操業に貢献するようになる。

川崎船の定義が無動力船であることを重視するならば、動力を付けた船はもはや川崎船ではなく、「川崎船によりマグロ漁が拡大した」とすることは異論があるであろう。蟹工船やさけ・ます母船式漁業に関する記述でも「川崎船」の名が出てくるが(宇佐美,2013)、これも動力船であり、赤羽(1998)は母川式漁業で使用された動力付の船体が最後の川崎船であるとしている。

動力付きの漁船の増加以後、釧路のマグロ漁業は、布施(1962)に区分された成長期そして全盛期に入る。この、成長期に入った大正9年(1920年)ごろ

には、釧路沖が全国有数のマグロ漁場と認識されるようになり、遠く富山、岩手、宮城県から出漁してきた回航船(外来船)が地元船を上回ほどに増加した。釧路港がマグロ流通の基地となっていく。

釧路市立博物館のマグロ漁業に関する写真と川崎船の展示から見えてくるものは、釧路の水産業発展のためにマグロ漁業が果たした役割である。布施(1962)は、マグロ漁業の果たした役割として、本漁業への着業により漁船の動力化が完成したこと、鮮魚流通機構が整備されたこと、釧路港が外来船の漁業基地としての役割を明らかにしたこと、そして釧路の漁業を支える人的、技術的な側面で従来の房総や三陸に加え富山県漁民の加入により技術的広がりが見られたことを挙げている。まさに、水産都市釧路をマグロが築いたと言っても過言ではなく、「鮪の釧路か、釧路の鮪か」であろう。

本稿の作成に当たり、釧路市立博物館には写真1および写真2の展示物の撮影、公表に多大の便宜を図っていただき、有益なご助言を頂いたことを感謝申し上げます。

## 参考文献

- 赤羽正春. 1998. 日本海漁業と漁船の系譜. 287pp. 慶友社. 東京.
- 布施 正. 1962. 釧路の鮪漁業. 釧路漁業発達史. 釧路叢書, 第4巻, 125-355. 釧路市.
- 長谷川英一. 2018. 明治時代の静内にもみる漁業の振興-北海道命名150年によせて-. 楽水, 863, 49-51.
- 林 英雄. 1971. ものいわぬ群れ-地方史物語(東国篇)-, 54-76. 新人物往来社. 東京.
- 川名 武. 1934. 鮪漁と海況との関係ニ就テ. 北海道水産試験場 水産調査報告, 第31冊, 1-80.
- 釧路市総務部地域史料室. 2003. 港町くしろ. 写真絵葉書で見る 遠い日のくしろ. 釧路叢書, 第35巻, 96-115. 釧路市.
- 宇佐美昇三. 2013. 蟹工船興亡史. 293pp. 凱風社. 東京.

注1 釧路市における二つの水産関連顕彰碑(1)佐野孫右衛門「佐野氏紀功碑」JFSTA NEWS. No.53, 1-3ページ.

注2 釧路市における二つの水産関連顕彰碑(2)漁業功労者嵯峨久「頌徳碑」JFSTA NEWS. No.54, 4-6ページ.

# 会務報告

## 理事会・総会のお知らせ

平成30年度の第4回理事会を以下のとおり開催しました。

平成30年度第4回理事会

日 時：平成31年3月14日

場 所：当協会会議室（三会堂ビル8階）

審議事項：

第1号議案 平成31年度事業計画及び収支予算について

第2号議案 会員の加入及び退会について

1 会員の加入

正会員入会申込者：中山一郎氏

2 会員の退会

正会員退会届提出者：永田房雄氏、三井潔氏、伊勢田弘志氏、平野敏行氏、井貫晴介氏

第3号議案 基金の返還について

報告事項

1 新規事業の採択について

2 当協会の現状について

3 その他

① 平成29年度決算見込について

② 役員の執行状況について

## 自主事業

### 漁場造成・再生用資器材の利用技術認定事業

新日鐵住金株式会社（現 日本製鉄株式会社）から2019年2月12日付けで漁場造成・再生用資器材「ビバリーブロック・ビバリーロック」および「ビバリーユニット」の利用技術について登録の更新申請があり、平成31年3月29日（金）に開催した平成30年度漁場造成・再生用資器材利用技術評価委員会において申請内容の質疑、評価を行い、更新の適否について審議しました。委員会からより良い利用技術としての改善を求める附帯事項を付した登録更新が適当である旨の答申を受け、当協会会長は平成31年2月20日から3カ年間の登録更新を承認しました。

平成30年度漁場造成・再生用資器材利用技術評価委員会

委員長：有賀祐勝（東京水産大学名誉教授）

委 員：一色賢司（北海道大学名誉教授）、岡本信明（東京海洋大学名誉教授）、影山智将（元 水産庁漁港漁場整備部長）、中山哲巖（前 国立研究開発法人水産研究・教育機構水産工学研究所水産土木工学部長）、山田久（国立研究開発法人水産研究・教育機構フェロー）、山本光夫（東京大学海洋アライアンス特任准教授）

### 水産研究・教育機構との懇談会について

今年度も国立研究開発法人水産研究・教育機構の協力を得て、懇談会の開催を計画しています。開催日時、場所等は随時メールにてお知らせいたします。どうぞよろしく願いいたします。

## 受託事業

### 栄養塩の水産資源に及ぼす影響の調査事業

#### 「栄養塩管理方針の検討」

本事業は水産庁の委託を受け、適正な栄養塩管理モデルの構築に資することを目的としている。国立研究開発法人水産研究・教育機構が共同研究の代表機関となり、「栄養塩等の水質環境が沿岸海域の漁業生産に及ぼす影響の解明」など複数の課題により成り立っている。この中で、当協会は「栄養塩管理方針の検討」の課題を担当し、毎年識者による検討委員会を開催して栄養塩の管理方針を検討するとともに、博多湾を対象海域として漁業実態、下水処理場における管理運転の実態、海洋観測による栄養塩の分布状況等を検討することとしている。平成30年度は、博多湾の西部水処理センター周辺において水質調査を行うとともに、漁業等の実態調査を実施した。その結果、管理運転を実施している期間に、処理場の排水口から1km程の地点でリンの濃度が高くなっていることを明らかにし、管理運転の影響範囲と規模を実測することができた。本年度は、検討委員会による検討を継続しつつ、30年度に収集した資料・データを用い、既存の物質循環モデルを対象海域に当てはめ、対象海域における物質循環の実態を把握する。さらに、既存の生態系モデルとの統合を図り、漁業資源を含めた生態系を構成する生物の動態を再現し、栄養塩供給の変化等に伴う漁業生物の変動を予測する内湾漁業生産管理モデルを構築する。

### サクラマス飼育環境管理設計概要作成業務（平成30年度で終了）

当該事業は、射水サクラマス市場化推進協議会（事務局：富山県射水市産業経済部農林水産課内）の委託をうけて、同協議会が取組むサクラマスの養殖について、養殖環境を把握し、問題および課題を整理し、適正な飼育環境管理方法を提示することを目的に平成28年12月から31年3月の足かけ3年に亘り実施しました。

具体的には、射水市が作成した地方創生推進交付金実施計画等に示された安心・安全オールいみず「サクラマス寿司」復興を図るうえで必要な2kg以上のサクラマスを40,000尾生産するうえでの課題と対策を検討しました。

3年の総括報告書では現地の施設・設備等の調査、事務局・飼育担当者との意見交換並びに提供された飼育情報等を踏まえて、生産体制と生産組織間の指揮命令の在り方、製品の安心・安全の確保策、飼育管理技術の向上策、飼育用水の確保策、県水産研究所の技術支援および地場産業化を図るうえでのあり方等を取り纏めました。

### 養殖用種苗生産拡大調査・検討事業（新規事業）

世界的な水産物需要の高まりへの養殖業の果たす役割は極めて重要になっており、我が国の養殖業の成長産業化を図るためには、養殖生産の三要素（餌、種苗、漁場）等に関するボトルネックの克服に向けた技術開発・調査を実施することが必要となっています。中でも、生食市場の拡大が顕著である海面で養殖したサケ・マス類については、内水面における海面用種苗生産能力の増大が生産拡大・成長産業化のための喫緊の課題となっています。

そこで、水産庁ではかかる課題解決のため、「平成31年度養殖用種苗生産拡大調査・検討事業」として、内水面におけるサケ・マス類の種苗生産適地の調査を行うとともに、今後、種苗生産拡大のための適地となり得る候補地及び種苗生産拡大のための方策の検討等を行うこととなりました。

当協会では水産庁から当該事業を受託し、本年度は平成31年度海面サーモン養殖検討会を設置してニジマス等の種苗生産適地調査の計画等の検討を行い、「内水面種苗生産適地等の調査」を実施します。同調査では、全国養鱒振興協会の会員および九州・四国を対象としてニジマス等の養殖生産実態、生産動向、養殖適地等の状況を調査します。九州・四国からは長崎県、佐賀県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県および愛媛県を選定し、各県在住の会員がシニア技術専門員として調査を実施することとしました。

当該事業は、平成31年度から2年間を予定しています。

## 水産研究・教育機構からの情報

### ■ 刊行物

FRAニュース vol.58 (2019年3月発行)



「FRAニュース」は水産研究・教育機構が年4回発行する広報誌で、当機構の業務や研究成果をわかりやすく紹介しています。

Vol.58は最新の水産工学研究を紹介した「水産業のミライにつなげる工学技術」の特集です。未来の水産業を元気あるものとするための、自動航行技術、最適航路選択、漁船のオール電化、自動釣り機、獲りたい魚だけを獲る定置網、進化した魚群探知機、津波などの大規模災害に備える漁港施設、沿岸資源を回復させるための漁場整備や、これらの技術を結びつけるシステム研究について紹介しています。

FRAニュースvol.58は以下のURLからダウンロードしてお読みいただけます。

<http://www.fra.affrc.go.jp/bulletin/news/fnews58.pdf>

おさかな瓦版 No.88 ケガニ (2019年3月発行)



「おさかな瓦版」は水産研究・教育機構が年6回発行するニュースレターです。小中学生以上を対象に、水産生物や漁業を分かりやすく解説しています。

No.88は、エビ・カニシリーズ最終回となる第12回目ホッカイエビです。日本周辺では岩手県以北の太平洋やオホーツク海などの沿岸部の藻場に生息し体長12センチくらいになります。北海道東部で6月になると盛んに漁が行われ、ホッカイシマエビ、シマエビとも呼ばれています。生息する藻場の色彩に合わせて体色を変化させること、オスからメスに性転換することなどについて、写真や図を交えて解説しています。

おさかな瓦版No.88は以下のURLからダウンロードしてお読みいただけます。

<http://www.fra.affrc.go.jp/bulletin/letter/no88.pdf>

### ■ 海上技術安全研究所との包括連携協定

当機構と海上・港湾・航空技術研究所海上技術安全研究所は、包括連携協定を平成31年3月1日に締結しました。

本協定は、世界トップレベルの実験施設群を有し海事・海洋技術の一大研究拠点である海上・港湾・航空技術研究所海上技術安全研究所と、我が国の水産分野における総合的な研究開発・人材育成機関である当機構が、燃料電池船・自律航行船の開発や船舶安全性向上をはじめ海洋・水産に関する技術などで、共通の課題解決に向けて協力することを定めるものです。両機関が相互の研究開発能力及び人材を活かして総合力を発揮することにより、海洋・水産に関する工学分野の科学技術の振興並びに産業界、地域社会及び国際社会の発展に資することを目的としています。また、国連が掲げる持続可能な開発目標(SDGs)の達成にも連携して貢献していきます。

#### 問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 経営企画部広報課  
〒220-6115  
神奈川県横浜市西区みなとみらい2-3-3 クイーンズタワー B棟15階  
TEL : 045-227-2600 (代表) URL : <http://www.fra.affrc.go.jp/>

# 事務局便り

今年は事務局に大きな変化がありました。

前田隼平さんと川瀬翔馬さんが出向の任期を終えて、其々株式会社シャトー海洋調査、いであ株式会社へ戻られました。二人には事業計画の検討・策定、契約に係る事務処理、関係委員会の運営、現場の調査と調整、委託者対応、報告書の取りまとめ等々多くの業務に対応して貰いました。お陰で協会の筋を通した成果を上げることができました。感謝します。今後も健康に気を付けて、それぞれの持ち場で一層活躍して下さい。

一方、河村佳正さんと服部克也さんが新たな戦力になってくれました。河村さんは本部で有明海水産基盤整備実証調査事業や二枚貝類生息環境調査委託事業を、服部さんは東海・北陸支部で伊勢湾における小規模施設の建設に伴う漁業影響調査を担当します。これまでとは随分と業務環境が変わると思います。健康に気を付けてよろしくお祈りします。

(文責：三戸)

## 「行く人」から皆さんへ

### 前田隼平さん

皆様、いつも大変お世話になっております。前田隼平です。本年3月をもって全国水産技術者協会への出向の任期を終え、株式会社シャトー海洋調査に戻りましたことをご報告いたします。

振り返れば2015年4月から丸4年に渡り、協会の職員、会員の皆様には水産分野および人生の先輩として本当に様々な事を教えていただきました。誠にありがとうございます。在籍中は主に土砂処分場と火力発電所の漁業影響調査に携わっていましたが、至らぬ点も多々ございました。その度に皆様のアドバイスや温かい叱咤激励に助けて頂いた事をあらためて感謝いたします。

漁業影響調査については、恥ずかしながら担当するまであまり内容を理解していませんでしたが、業務に携わる中で、今後の日本の沿岸漁業を維持し、将来に互り持続的に海の恵みを受け継いでいくうえで非常に重要な調査、考え方であることを痛感しました。また、調査の中で、事業実施者と漁業者双方の主張や考えを直接見聞きしたことは、引き続き漁業と海の調査に係る者として貴重な財産となりました。今後はこの4年間で培った経験を無駄にすることなく、活かしていきたいと思っております。

末筆ではございますが、皆様のさらなるご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

今まで、本当にありがとうございました。



サクラマス飼育タンクに入り給水量を測る前田さん（本西理事と共に）

### 川瀬翔馬さん

平成29年4月3日から平成31年3月29日まで2年間当協会に勤務し、4月1日から古巣であるいであ（株）に職務復帰いたしました川瀬翔馬です。当協会に在籍中は、九州地方および東北地方の業務担当として、各業務に取り組んできました。九州地方では、有明海を対象に近年休漁していますタイラギの漁業再生のために、餌料環境の改善を目標とし漁場の造成事業に取り組む、一方で、タイラギ等有用二枚貝類を摂食するナルトビエイについて、行動等の生態解明に努めてきました。また、東北地方では、ノリやカキを対象とした開発事業に伴う漁業影響調査に取り組んできました。いずれの業務も日本の水産業を維持する上では、大変重要な課題であり、現地の状況を目の当たりにし、また漁業者と接する機会も多く、水産業の現状を鮮明に感じることができました。

今後は、当協会ですぐれた知識や経験を生かし、民間として日本の水産業の維持に向けて、引き続き皆様とともに貢献していきたいと考えています。



ナルトビエイに小型記録計（データロガー）を装着している川瀬さん

## 「来る人」から皆さんへ

### かわむらよしまさ 河村佳正さん

平成31年3月31日までいであ株式会社で勤務し、4月1日から川瀬翔馬さんの後任として研究開発部へ主査として出向にて着任致しました河村佳正です。いであ株式会社では就職以後25年間、静岡県焼津市にあります同社環境創造研究所に勤務し、生物分析と海生生物を用いた飼育試験に従事しておりました。生物分析では主に海域の魚卵稚仔魚分析を担当し、内湾から沖合に至る試料の分類同定、解析を行いました。また、飼育試験では平成21年より当協会で開催している、漁場造成・再生用資器材利用技術評価事業に関連する、製鋼スラグ関連製品の海生生物に対する安全性評価の基礎資料を得るための毒性試験等を担当しました。今後、当協会ではこれまで培ってきた技術や経験をもとに、会員の皆様と共に各種開発による漁場環境への影響や保全、造成等の調査・研究に取り組んでいきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



焼津沖で釣った春ブリ (8kg)

### はっとりかつや 服部克也さん

平成最後の年となる31年に愛知県を退職し、4月から東海・北陸支部に非常勤として採用されました服部克也と申します。私は愛知県職員として35年間勤務させてもらえましたが、その多くを水産試験場で過ごさせてもらえる幸運に恵まれ、ご当地サーモンの「絹姫サーモン」の開発や、養殖ウナギの雌比率を高める方法、豊川や矢作川の天然遡上アユの状況把握などに携わることができました。幼少から何があるのかなあと水溜りを覗き込んだり、魚類図鑑丸暗記、もう少し頑張っていたら「さかなクン」になれたかも・・・という魚大好き人間で、運よく大学も水産関係に進め、そして水産試験場での仕事に従事、魚好き冥利の時間を持ててきました。また、子供の頃のフナ釣りからスタートした釣りも今は海の大物狙いに、最近は頭の中が釣りに占有される毎日で、釣りを通して魚食普及に携われたら良いなと夢を抱いているところです。こんな自分がお役に立てるのか不安ばかりですが、どうかご指導のほどよろしくお願いいたします。



伊勢湾でゲットした寒ブリ (9.3kg)

一般社団法人 全国水産技術者協会

〒107-0052 東京都港区赤坂一丁目9番13号 三会堂ビル9F TEL 03-6459-1911 FAX 03-6459-1912  
E-mail zensuigikyo@jfsta.or.jp URL <http://www.jfsta.or.jp>